



Data 2021-142

監督：ケヴィン・マクドナルド
 原作：モハメドゥ・ウルド・スラヒ
 著『モーリタニアン 黒塗りの記録』（河出文庫刊）
 出演：ジョディ・フォスター／タハール・ラヒム／シャイリーン・ウッドリー／ベネディクト・カンバーバッチ／ザッカリー・リーヴァイ

👁️👁️ みどころ

キューバに設置されたグアンタナモ収容所の“悪名”は知っていたが、「モーリタニアン」って一体ナニ？ “黒塗りの記録”は日本でも“モリカケ問題”で有名になったが、2001年の9.11同時多発テロの首謀者の、未決拘留(?)を巡るそれは・・・？

14年2ヶ月間もの長期拘束の実態は、ベストセラーとなった“手記”によって赤裸々にされたが、その陰には献身的なプロボノ活動が！ 作品の質にこだわる名女優ジョディ・フォスターには、本作の人権派弁護士役がピッタリ！ 法曹界を志す人は、こりゃ必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このタイトルはナニ？原作は世界的ベストセラーの手記■□■

本作は冒頭、ある国で举行されている若い男女の結婚式の姿が描かれる。雰囲気的には中東のどこかの国？そう思っていると、そうではなく、そこはアフリカの北西部にある国、モーリタニアだ。一組の男女の結婚式にこれほど多くの人が集まっていることは日本では考えられないが、スクリーン上はそんな楽しい雰囲気から一転して、新婦側の出席者の一人であるモハメドゥ・ウルド・スラヒ（タハール・ラヒム）がアメリカ軍から任意同行を求められるシークエンスに変わっていく。さあ、大変だ。

時は2001年11月。スラヒの逮捕容疑は、世界を震撼させた米国の同時多発テロの首謀者ということだから、さらに大変だ。アフガンからの撤退は、トランプ前大統領の後を継いだバイデン大統領の手によって2021年8月末に実行されたが、それは惨憺たるものになった。他方、2021年9月11日の2日後の9月13日、ニューヨークタイムズの一面には、真っ白なローブをまとい砂漠を歩く男の写りが載った。この男こそ、手記『モーリタニアン 黒塗りの記録』の著者である、モハメドゥ・ウルド・スラヒその人。

その出版は、2015年のことだ。この世界的なベストセラーになった手記には、タイトルどおり、数千か所の黒塗りが入っていたが、それは一体なぜ？日本でも、いわゆる“モリカケ問題”の中で“黒塗りの記録”が大問題となったが、本作のそれは全然規模が違うらしい。しかし、知らなかったなあ、そんな本。これはしっかり本腰を据えて観なければ。しかも、本作の主人公はジョディ・フォスター演じる人権派弁護士ナンシー・ホランダー、これも実在の弁護士だから、本作は必見！

■□■プロボノ活動とは？ナンシー弁護士の決断は？■□■

日本の弁護士会にプロボノ活動（無償奉仕活動）という概念が入り、定着したのは、ここ20年のこと。私が弁護士登録し、公害訴訟に身を投じた1974年にはそんな洒落た言葉はなく、弁護士各自の自由な選択だった。プロボノとはラテン語で Pro Bono Publico（公共善のために）という意味だが、そんな概念が生まれたのは、弁護士法第一条に、「弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする。」と書かれているにもかかわらず、金もうけに走る弁護士が多いため。そんな悪しき風潮を少しでも正すために、プロボノ活動を行うことを義務付けたわけだ。しかし、私が公害訴訟の弁護団には入ったのは、そんな義務を果たすためではなく、100%自由意志だった。

しかし、ニューヨークの大手法律事務所の有名弁護士であるナンシー・ホランダー（ジョディ・フォスター）は、なぜキューバのグアンタナモ収容所に長期収容されている、9・11テロの容疑者スラヒの弁護を買って出たの？そのことについては、第1に、事務所の経営者会議におけるナンシーの、「これは許可を求めているのではない。報告しているだけだ。」というプロボノ活動の本質に注目したい。いかにも信念の強いベテランのナンシーについては当然それに納得だが、本作では第2に若い女性弁護士テリー・ダンカン（シャイリーン・ウッドリー）も自らの強い意志で通訳兼アシスタントを買って出ていることに注目したい。だって、9・11テロの首謀者とみなされている容疑者の弁護活動をすることは、イコール愛国的な米国民から敵視されることを意味するのだから。さらに、そんな事件をたった二人だけで？日本なら当然、大弁護団を募集すべき事案だが…

■□■テロの首謀者捜しに大統領令！担当検事の重責は？■□■

スラヒの原作（手記）に惹かれ、自身の製作会社で映画化することを決意したのは、『イミテーション・ゲーム エニグマと天才数学者の秘密』（14年）（『シネマ35』29頁）で注目された俳優、ベネディクト・カンバーバッチ。彼は監督をケヴィン・マクドナルドに委ねた上、自身も「グアンタナモに収容中の敵戦闘員を、9・11の戦犯法廷で裁け」という大統領令が下される中、政府が「死刑第1号に」と望むスラヒの起訴を担当することになったスチュアート中佐役を演じることに。そんな大事件に担当検事として抜擢されることは、もちろん大変な名誉。ここで大統領の意思を実現すれば、その後のキャリアも順風満帆になるはずだ。法廷対決の前にレストランでナンシーと初のご対面を果たしたスチュアート中佐は自信満々だったが……。

■□■機密、機密、機密！黒塗りの記録ばかりでは！？■□■

私が最高裁でも勝訴した「大阪阿倍野再開発訴訟」を提起したのは1984年5月。その当時の行政事件訴訟では、行政の情報は容易に開示されなかったが、その後の日本は大きくサマ変わり。裁判の場での情報公開は大きく拡大した。しかし、朝日・毎日両新聞が執拗に追及している、いわゆる“モリカケ事件”では、一定の情報は公開されたものの、それは黒塗りの記録ばかりだったらしい。

本作中盤で興味深いのは、弁護士のナンシーが依頼者スラヒに対して「真実を語れ！そうでなければ弁護できない」と執拗に迫ること。これは弁護士として最も重要な姿勢で、それをどこまで依頼者との間で実現させ、信頼関係を築けるかどうか、弁護活動の生命線だ。したがって、そんなストーリーの展開は当然だが、本作で面白いのは、スラヒを起訴すべく奮闘努力しているスチュアート中佐の方も、起訴に値する証拠、有罪に値する証拠の収集に躍起になっているにもかかわらず、中途半端な材料（証拠）しか与えられないことだ。これにキレてしまったスチュアート中佐は、訓練生時代の同期であるニール・バックランド（ザッカーリー・リーヴアイ）に相談を持ちかけたが、「機密だ！」と一蹴されてしまったから、アレレ・・・？ナンシーがワシントン連邦地方裁判所に求めた情報公開請求に対して、裁判所は2008年、「政府は10日以内に書類を提出せよ」との命令を下したから、スチュアート中佐の焦りは頂点に達することに。そんな状況下、スチュアート中佐はいかなる手段で黒塗りされていない記録を閲覧することができるの？

他方、ナンシーの方もやっとたどり着いた資料の中から、スラヒの「自白調書」を見つけたからアレレ・・・？これは一体ナニ？さあ、弁護士と依頼者の信頼関係の構築は如何に？本作は作り物ではなく、スラヒの手記を基にした「Based on True Story」だから、以降展開される生々しい法廷闘争をしっかりと確認したい。

■□■未決拘留14年！これが人権の国アメリカの実態？■□■

戦前の日本には、いわゆる“未決拘留”なる制度があった。戦後、アメリカの刑事訴訟法制度を取り入れた日本では、“別件逮捕”という“抜け道”はあったものの、一定期間内での起訴、不起訴が義務付けられた。しかるに、“人権の国”アメリカに、今なお未決拘留なるものがあるの？そんなはずはないが、2001年にアメリカ政府の要請によってモータニアで拘束されたスラヒに対して、2010年、連邦裁判所判事は、即座に釈放するように命じたが、米国政府が上訴したことによって、2016年10月17日に釈放されるまで、彼は実に14年2か月も“未決拘留”が続いたから、ひどい。「法の下での平等」は、基本中の基本。それは、民主主義の国アメリカが一番わかっているはずだが・・・。

現在、日本でも不法滞在者をめぐる入管の審査等の現場で同じようなことが起きているそう。誰もがナンシーのような弁護士になれというわけではないが、少なくとも法律を勉強し法曹界を志す人は、こりゃ必見！本作を鑑賞して、いろいろと考えなくちゃ！

2021（令和3）年11月9日記